

姉妹にしつこく言い寄る男の頭は、ソノが刈
る。ソノも母親の見よう見まねで髪結いを生業と
してきたが、娘たちが免状をもらって花ノ根に
帰ってきてからは、こんども見よう見まねで男髪
の刈り方を身につけた。刈られる側にしてみれば
ひどい苦行だが、ソノは痛くもかゆくもない。

「たかがサンパツをおぼえるのに、やれ学校だ、
国家試験だ、まどろっこしい手数をかけることで
あります」

童顔を上向きに、けろりとしたものである。そ

も引き受けようかという成り上がり者」である。

中村ソノが木戸ゆいを決定的に憎むに到ったの
は、ソノの母親が死んで、その葬式のとときである。

神宮寺のオジュツサンの読経もしめやかに終わり、
カミノイリの墓地まで葬列を進めていく途中、橋
の手前で紋付きを着た男衆から渡ることを阻ま
れた。小原恵吉村議のむすこの嫁とりの行列が通
るから待て、というのであった。村議会議員の肩書
きを光らせたような口ぶりにソノはむっとした。

一つしかない橋だから、普通ならおめでたい

れでも客足が遠のかないのは女系家族の功德で
もあろうか。

ゆいとソノはほぼ同年輩でもあり、花ノ根での
番付けも似たあたりとあつては、互いにライバル
と意識しないのが不思議で、ソノにいわせれば、

ゆいは「村の男という男にべたついて、安物の
焼酎をケタ違いに高く売りつける」性悪女で
あり、ゆいが評するソノという女は「たかが髪結
いふぜいのくせに、村の男どもの前に娘らの赤
い蹴出しをちらつかせて人気とり、女収入役で

行列を先にしてしかるべきであった。ソノにして
もそれくらい考えないわけではなかった。

「暑い太陽の下にいつまでも棺をさらしておい
たのでは、腐敗してしまうのでありますから、わ
れわれの方が先に渡ります」

「おめでたい婚姻の席では、イヌとかサルとかの
ことばすら忌み嫌われるものを、葬輦に先を渡ら
れたとあつては、われわれ先達の面目が立たない
のであります」

「あなたの面目は腐敗しないでありませうが、

われわれの担いでいるのは棺であります。そういう文句を並べている間にも渡ってしまえるのに、時間が経過するばかりであります」

「もうすぐ行列も来ると思うのであります。しばらく待っていたくださいましよう」

「酒を多量に飲んで、周囲の人間に道具や何かを見せびらかしながら来る行列が、そんなに早く参るものでありましようか」

騒ぎを聞きつけて橋に近い家々から見物人が駆けつけてきた。泥棒がいるわけではなく、火事があるわけでもない。

なかつたから大安になってしまったが、小原恵吉へのいやがらせの気はなかつた。恵吉がいうのならともかく、全く何の縁もない木戸ゆいがどうして文句をいう筋合いがあるであろう。こうなつては意地からでも対抗する決心をした。

見物人の中にもゆいの言を正しいとする者や、ソノを尤もだとする者が出て、カンカンガクガクの大論争になり始めた。その間にも太陽は見境いなく高くのぼり、論争の当事者はもとより静観の態度を持している者までじつとりと汗ばんできた。

るわけでない花ノ根だ。住人たちはスリルとサスペンスに飢えているのである。男衆との問答のうち先に先を譲る気になりかかっていたソノだのに、表へ出てきた木戸ゆいが聞こえよがしにいったものだ。

「まあ、選りに選つて大安の日に葬輦を出すとは。賢い人の考え方はまた格別なものであります」

わがことのように大声で非難したから、ソノはすつかりカツと頭にきてしまった。

夏場のことではあり、日延べするわけにはいか

狭い棺の中のソノの母親の遺骸はいかばかりであつたか。埒もあかぬうちに小原家の行列も向こうからさしかかつてきた。元老、三野庄平が出馬するほかない。

「大きな都市へいけば、毎日どこかで人が死んでおり、どこかで嫁とりもしているのであります、その二つの行列が道で行き交うこともしばしばであります。こういうことを気にしていたのでは葬式も出せなければ結婚式も挙げられません。きょうのところは二つの行列が同時に渡り始め

「渡り終わるにしくはありません」

さして広くもない谷川の橋の上を喪服と裾模様
がぞろりぞろりとすれ違った。末代まで話の種子
になるであろうこの情景に、見物人はわくわくし
ながら見入ったこと言うまでもない。

この日から、中村ソノは木戸ゆいをこれまでに
もまして憎んだのである。

「おゆい後家と小原恵吉の間には何かあるに違
いない。そう思われてなりません」

おゆい後家と何かある、もしくはあつた男は

ということとは、あなたも困るに違いないと思いま
す。なんせ、健吾とあなたの取り引きを私が黙っ
ているからこそ、あなたはどのようにふところ手
で暮らしておられるのでありますから」

庄平は怒りをこめた目で恵吉の顔を見つめた。

「あなたは私にどうしてくれというのであり
ますか。そのように脅迫がましい口ぶりでものを
いうとは、私にとって心外に耐えませんが、不快
であります。誰の力によってあなたは村議会の議
席を保っていると考えられているのでありますか」

小原恵吉だけに限らなかったのだが、ソノは恵吉
に絞ってしゃべった。損をしたのは恵吉である。

女客も少なくない中村芸術美容館でこのよう
なことを吹聴されては、次の選挙のときにどのよ
うな悪影響が出るものやら、はかり知れないから
であつた。

そのことを最も気にするのは、もちろん当の
恵吉本人であつて、三野庄平を訪れ、ひそかに
相談を持ちかけたものだ。

「私は困っているのであります。私が困る

恵吉はこれをいわれるのがつらい。しかし、も

う自分の力だけでも当選できる時期がきている
のではあるまいか。とすれば、いつまでもこの
古狸の操り人形に甘んじているのは愚かな
方法だ。だが庄平の応援がなくて落選すれば、

自分は単なるカミノイリの中産階級の一人にし
か過ぎず、村長を相手に堂々たる質問演説をぶち
まくる名士ではなくなる、小学校の生徒からも
道路でおじぎしてもらえなくなる。現に村会に出
ていればこそ、むすこにカワラ木の分限者から嫁

がきたではないか。味方につかなければ必ず敵に
回るであろう三野庄平だ。

「どうにかしてほしいのかと聞かれましたも、

私はどうしてほしいのか、ほんとうのところは
わからないのであります。ただ、あのとき中村ソ
ノの母親が死にさえしなければ、私のこのよう
な悩みはなかったでありましょうと思いますと、
私は自分の不運が嘆かれてなりません」

恵吉村議、ついに不覚にも涙をこぼしたのであ
る。

(二)

花ノ根の秋は、三野庄平の怒鳴り声で始まり、
榎の茂太郎の叫び声でたけなわを迎え、滝の仁作
がシダを踏み折る音で終わる。

泳ぐに肌寒い時候になると、花ノ根の子供たち
は鮒すくいに転向する。大川へ出かけての帰り、
谷川をさかのぼってくれば、いやでも目につくの
が庄平の家の庭の芙蓉である。みじことな古株で、
子供でなくとも一枝ほしくなろうというものだ。

「それは私にいつても筋ちがいというもので
あります。しかし、おソノ後家があなたの悪い
評判を宣伝しても、安心しておるがよろしい。あ
なたをまだ私は見捨てようとは少しも考えて
はいないのでありますから」

小心そうな恵吉の涙を見ては、庄平もこうい
わざるを得なかった。しばらくは恵吉を利用する
ほかないが、そのうち、誰か新しい者を立てなけ
ればなるまいと庄平は考える。その日は案内近
いかも知れない。

他の家にも芙蓉の株がないわけではない。子供た
ちの楽しみは花を手折ることよりも、むしろ庄平
の怒鳴り声を聞くスリルにある。

だから、大声を発しながら庄平の庭先に近づい
ていく。庄平の方はそれを待ちかまえている。
庄平も怒鳴ることをレクリエーションの一つに
しているのかも知れない。大声を出すことは、消化
器官の活動を大きく援けるからだ。時には子供た
ちを追っかけて田の畦を走ることもあり、これも
いい運動になった。

芙蓉が咲き終わると、シゲの家の裏の大榎が実をつけている。榎の実は、青いときには突き鉄砲のタマになり、赤黄色に熟れるとひなびた甘さを持つ。榎はわりに枝がもろいので、子供たちが登ると転落する危険も大きい。シゲが叫ぶのは木の実が惜しいのではなく、転落への警告なのである。

シゲ自身が子供のころ、この大榎から落ちて思いつきりひざを挫いたことがある。その頃からこの老木はちっとも大きくなっていないようである。

(以上7月23日放送分)